

2008年度を迎えて

日本放射光学会会長
雨宮慶幸



既にご存じのように、学会年度がこれまで1月1日～12月31日であったのが、10月1日～9月30日に変更になりました。その変更に伴い、9月30日までの変則的な9ヶ月間の暫定年度が終わり、2007年10月1日から2008年度の学会年度が新しく始まりました。それとともに、会長として暫定年度ではなく正式な年度の1年目を迎え、再出発することになりましたので、改めてよろしくお願いします。

既に述べましたが、外国には多くの放射光施設がありますが、放射光学会があるのは我が国だけであり、本学会がどのような役割を果たしていくかを考える際に、見本や参考になる先例は世界には存在しません。その意味で、本学会は文字通りオンリーワンとしての自覚をもって、学会活動を通じて放射光科学の推進、発展に如何に貢献できるかを常に真剣に考えていく必要があると感じます。

私が会長を務める期間に目指したいことは昨年既に述べましたが、ここに改めてしるし、2008年度の決意としたいと思います。

1. 他学会との連携の強化（放射光科学の先端性と裾の広がり両立を目指す）

本学会は「放射光」を共通のキーワードにする学会ですが、成熟期を迎えたこともあり、「放射光を使って当たり前」という実験の研究成果は本学会ではなく、他の学会で発表される機会が増えてきました。これは、会員数が頭打ちになっている一因でもあります。基本的には大変に喜ばしいことです。このことは換言すれば、本学会と他学会との間の双方向の風通しの良さがこれまで以上に求められる時代になったと言えます。すなわち、「放射光」に軸足を置く研究者とそれを単なる一つのツールとして利用する研究者の間の円滑な情報交流を可能にする仕組みが求められます。他学会に対して放射光科学の先端性を的確に情報発信し、また、放射光利用の研究成果の他学会および社会における位置づけに関する情報を的確に受信する仕組みが必要です。その為には、他学会との共同開催の研究会、他学会の年会等を活用した研究発表の機会を実現し、広い意味での放射光科学を発展させたいと思います。これらのことは、X線自由電子レーザーの利用研究を推進する上でも、また、新しい先端的リング型放射光源を実現する上でも重要な要件と考えます。

2. 若手研究者の育成

我が国の少子高齢化の波は、どの学会にも影響を及ぼします。優秀な若手研究者が集ってくるような刺激と魅力のある学会を目指す必要を感じます。ここ数年開催されてきた「若手を中心としたワークショップ」を相続し、更に発展させていきたいと思えます。

3. アジア・オセアニアにおける放射光科学のリーダーシップ

アジア・オセアニアにおける放射光施設の数が増えつつある現在、放射光科学の先進国として日本放射光学会がこれらの地域における放射光科学の推進にも貢献することが、期待されています。2006年にアジア・オセアニアフォーラムが正式に発足し、第1回WSが2006年につくばで、第2回WSが2007年に台湾で開催されました。また、2007年8月にはサマースクール（Cheiron Summer School）がSPRING-8のサイトで成功裏に開催されました。今年開催される予定であるオーストラリアでの第3回WSやSPRING-8でのサマースクールに対して、引き続き積極的な協力を行って行きたいと思います。

4. 放射光施設間のシナプスとしての役割

これまで本学会は放射光施設が存在が基盤となって活動が展開されてきました。これからもこの構図は必要不可欠なものだと思います。放射光施設間には、あるときは競争（Competition）、また、あるときは協力（Cooperation）が存在します。本学会は、それらの二つのCがバランスしてコヒーレント（Coherent）な発展に繋がるように、その間の情報伝達（Communication）を果たす最も大切なCの役割が期待されていると思います。年会・合同シンポ等の機会を活用して、施設間および各利用者懇談会間の情報伝達（Communication）の機能を果たすシナプスとしての役割を更に高めたいと考えています。

本年度もよろしく申し上げます。